

短編映画企画書

# 緑の雪

---

古川原 壮志  
コガハラタケシ

2018.08.24

愛する人が死ぬ。  
わたしは何を言えばよかったのか。

あの日、わたしは妻に嘘をついた。

窓の外、雪が降っている。

子供たちは巣立ち、妻に先立たれた一人暮らしの老人、中尾耕史（77）  
妻の死後、悲しみから酒に溺れ、アルコールで思うように口も聞けなくなり、  
オムツをつけ寝たきりに近い状態で暮らしている。

ある日、介護士に体を拭いてもらっているとき、窓の外に降る雪が耕史の目にとまる。  
そして耕史は思い返す。

病院から末期がんの妻を連れだした、森での最後の散策。

妻と交わした最後の会話。

そして嘘。

耕史は再び、妻と出かけた森へ入っていく。

## 企画意図

---

寝たきりで喋ることのできなくなった祖母と50音のひらがなボードを使って会話したことが企画のはじまりです。また遠い昔、祖父が亡くなった時の情景が色濃く自分の中で残っています。末期がんだった祖父を病院から連れ出し、最後一緒に山道を散歩したときのこと。その時の祖父とのやりとり。母が最後まで祖父に言わなかったこと。

現在、団塊世代が65歳を超えてきたことで、孤独死、介護問題、終末医療問題を以前にも増して見聞きするようになりました。自分の親世代が老後を迎える今、過去の祖父母との記憶が色濃く蘇り、この状況を背景とした短編映画を制作したいと強く思った次第です。

現在の日本の終末医療や介護問題という社会性のあるテーマを扱いつつも、主人公を私達誰もが共感できる一人の人間として、自身の死期を迎えたときに失われた愛する人を思うに至るまでの、ある愛の形を描いていきます。

このテーマの一番の当事者である、死を迎える老人たちの姿を正面から包み隠すことなくリアリティをもって描くことで、見る人の心に焼きつく映画を作りたいと思います。

## 作品内容

---

ジャンル：ドラマ

尺：15-20分

舞台：古くなった集合団地、郊外の森（自然公園）

ターゲット：20代より上の世代、海外映画祭（社会的テーマを扱うなど）

## 登場人物

---

中尾耕史（ナカオコウジ）（75-77）

喋るのは得意ではない。照れから口を開くと皮肉を言ってしまう。妻を深く愛している。

中尾咲（ナカオサキ）（72）

耕史の妻。末期がんで余命いくばくもない状態。夫を深く愛している。

石山かずえ（イシヤマカズエ）（53）

介護士。仕事に慣れている。

## ストーリー1

---

### 終末医療、介護、孤独死……

死に面した老人の現実と記憶、そして夢を通して描く。

これは、ひとりの人間が失われた愛を見つける物語。

冬。集合団地。家具や物で埋めつくされた部屋。そこかしかに乱雑に野鳥の写真が飾ってある。部屋の中央、介護ベッドの上には中尾耕史（77）が横たわり、ぼんやりと宙を見つめる。耕史の呼吸音が室内に静かに響く。微動だにしない耕史。静寂。窓の外は急速に暗くなっていく。耕史はゆっくりと起き上がり、時間をかけながらも、暗い台所へと入っていく。震える手で棚の奥から一升瓶を出し、こぼしながらグラスに注ぐ。一気に飲み干す。テーブルの上に溢れた日本酒を舐めてふく耕史。グラスにまた注ぐ。

介護士の石山かずえ（53）がバタバタとやってくる。ベッドの上に横たわっている耕史。耕史の酒の匂いに気づき、軽く咎める。うめくような返事しかしない耕史。かずえは部屋の暖房がついていないことに気づき、暖房をつける。かずえは大きな声で耕史に調子はどうだと聞く。「死にたい」と答える耕史。かずえは困った顔をするが、すぐに笑い飛ばす。慣れた様子で、部屋を掃除し、洗濯物を済ませていく。そして耕史を裸にすると、濡れタオルでごしごしと身体中を拭く。オムツを取り替えられ陰部を拭かれているとき、小水が漏れ出てしまう耕史。かずえは笑って後始末をする。ベッドに腰掛け、湯桶の中で足を洗われる耕史。かずえはずっと話しているが、耕史は黙ったまま、ぼんやりと窓の外を見ている。雪が降っている。

## ストーリー2

---

ベッドの上の耕史。じっと雪を見ている。かずえはテレビのチャンネルを所在無げにパチパチと変える。耕史に何が見たいか、それともラジオでも聞くかと尋ねるかずえ。森の音、と呟く耕史。スマホで森の音を探し再生するかずえ。落ち着いた耕史を見ると、買い物に行ってくるると部屋を出て行く。耕史は窓の外の雪を見ている。部屋は森の音に包まれる。

(耕史の回想・二年前) 森の音がつづく。車椅子、チューブを繋がれた中尾咲(72)と傍らには足腰のしっかりしている耕史(75)が付き添う。野鳥の鳴き声が聞こえる。立ち止まり、木々の間を飛び交う鳥達を眺めるふたり。飛び交う野鳥の名前を言い当て、咲に話しかける耕史。ふざけて「今度は、焼き鳥を食いに行こう」と笑う耕史。しかし咲は、チューブから息が漏れるような音をさせるだけ。咲の視線は定まらず、揺れている。

森の奥へと進み、小川に出てくるふたり。川向こうにはたくさんの白い花を咲かせたユキヤナギの群生が見える。白い花が水面に反射し、雪のように揺れる。じっと食い入るように見つめる咲。耕史が「今度は、雪を見に行こう」と咲に声をかける。咲は花をじっと見つめたまま。やがて耕史の方を振り返り、ゆっくりと耕史の手のひらに指で文字を書く、「わ・た・し・し・ぬ・の」と。耕史を見つめる咲。耕史は黙ったまま。そしてようやく口を開くと、「いっしょに雪を見に行こう」とだけ繰り返す。川のほとりにじっと佇むふたり。

団地の耕史の部屋。森の音はつづく。ベッドの上の耕史はゆっくりと起き上がる。窓を開け、ベランダへと出ていく。暗闇の中、白い雪が舞う。耕史は雪へ手を伸ばし、そっと掴む。そして振り返ると、介護ベッドの上、そこにはもうひとりの耕史がいる。微動だにせず、薄く目を開けたままのもう一人の耕史。ベッドの上の耕史をじっと見つめるベランダに佇む耕史。

(耕史の想像) 森。現在のパジャマ姿の耕史。一人、森の奥へと入っていく。

団地の耕史の部屋。ベランダには誰もいない。ベッドの上の耕史が一人、微動だにせず。室内には森の音がつづく。

終わり

## 撮影・演技に関して

---

登場人物たちの人生の終末の姿を何よりもリアルに表現したく思います。

痩せ細った足、変形した爪などは、実際に介護されている方を撮影させていただき、インサートとして本編に入れていく考えです。そのため登場人物たちの芝居に関しても、本物と見まがうような見え方を想定しています。

それは強い感情の起伏をそのまま伝えるのではなく、淡々と死期を迎えた人物たちとしたリアルなものです。手は震え、片手ではうまくものも掴めず、両手で箸を握る、目の焦点は虚ろに揺れ、定まることはない。それは生と死の境で、なんとか意識を保っている状態の人々です。

登場人物が介護士の方に本当に一通り介護される様子を、カメラを止めずにドキュメンタリーのように撮影するなど、杓子定規に決めた動きでないリアルなやりとり、アクションを撮影していきます。



## メッセージ

---

脚本を書くうえで、ケアワーカー、介護士、そして介護の現場と取材をさせていただきました。家族に介護してもらえる方から、一人暮らしをしている方まで、様々な状況がありました。ある一人暮らしの老人の家はゴキブリで溢れ、冷蔵庫の中は仕出しの弁当の残りものとペットボトルの水がただけでした。「ただ生きるのではなく、人として生きるにはどうすればいいのか」ケアワーカーの方がおっしゃっていた言葉が胸に刺さりました。

「緑の雪」は、人生の終末期を背景にはしつつも、あくまで「大切な人を思う心」をメインテーマとして描いていきたいと思います。観客が自分たちのこれからを重ね合わせ、そして幼き頃に見た祖父母の姿を思い起こし、考える。そんな映画を作りたいと思います。